

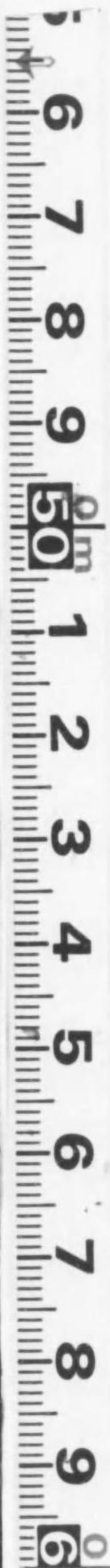
特 259

155

菅原時保禪師

碧巖錄講演

(其六)



始



特259
155



臨濟宗
菅原時保
建長寺派

菅原時保禪師

碧
巖
錄
講
演

(其六)



碧巖錄提講

第十則 睦州掠虛

或ときは孤峰頂上、——或ときは十字街頭、或ときは閑不
徹、——或ときは大忙生、——或ときは維摩こなりて沈黙、
——或ときは傅大士こなりて多口、——一に住せず、二を
守らず、處々眞、處々眞、之是が禪學者の平生底にして、而し
て禪學者の面目であります。」

◎垂示

垂示云、恁麼恁麼、不恁麼不恁麼、若論戰、也箇箇立在轉處、
所以道、若向上轉去、直得、釋迦彌勒文殊普賢、千聖萬聖

天下宗師、普皆飲氣吞聲、若向下轉去、醯雞蠛蠓蠢動含靈、一一放大光明、一一壁立萬仞、儻或不上不下、又作麼生商量、有條攀條、無條攀例、試舉看、」

讀方

垂示に云く、恁麼恁麼、不恁麼不恁麼。若し論戰せば、也箇箇、轉處に立在す。所以に道ふ、若し向上に轉去せば、直に得たり、釋迦、彌勒、文珠、普賢、千聖萬聖、天下の宗師、普く皆氣を飲み、聲を呑み、若し向下に轉去せば、醯雞、蠛蠓、蠢動含靈、一々、大光明を放ち、一々、壁立萬仞ならんご。儻し或は不上不下ならば、又作麼生か商量せん。條有れば、

ば、條を攀ち、條無ければ例を攀づ。試みに舉す看よ。」

必ずしも禪家者流に限つたことではありません。されど苟も禪家者流の人であるならば、恁麼、不恁麼を自由自在に使用して、「上求菩提 下化衆生」をなさねば本分が立ちません。名のみ有りて其實無きものは何れの方面にも頗る多い。禪家者流も又其數に漏れず、特に現代は其名美にして、其實醜なるもの、みご云うても敢て過言に非ずであります。」然れども、お互は古人の正師家の如く、恁麼、不恁麼を横拈倒用して、自他共に心身脱落することに著目すると共に修養を怠つてはなりません。始めに恁麼、不恁麼を世間的に説明し、次に恁麼、不恁麼を

禪宗的に提講致します。

四

恁麼、不恁麼を世間的に説明致しますれば、恁麼はイエス、不恁麼はノオ、恁麼は然り、不恁麼は然らず。」此恁麼、不恁麼の一語で、人事萬般を判断し盡すことが出来るのであります。——凡そ世の中の事は、其變ずる所より見れば、天地と雖も一瞬する能はず、其變ぜざる所より見れば、物と我と永く存すであります。一瞬する能はざる方は差別にして相對的、物と我と永く存する方は平等にして、絶對的、——絶對を離れて相對無く、平等を別にして差別無し、差別即平等、平等即差別であります。故に恁麼の外に不恁麼無く、不恁麼の外に恁麼無し、

恁麼即不恁麼、不恁麼即恁麼。——云ひ換へますればイエスの外にノオなく、ノオの外にイエスなし、然りの他に然らざるなし、然らざるの他に然りなし、然り即然らず、然らず即然り、と云ふことになります。恁麼の道理を基礎とすれば、有形必ずしも有形に非ず、無形必ずしも無形に非ず、大必ずしも大に非ず、小必ずしも小に非ず、是非、長短、輕重、寒暖等も亦復然りであります。故に有形の處に居れば有形が恁麼にして、無形は不恁麼、無形の處に居れば、無形が恁麼にして、有形が不恁麼、——大の處に居れば大が恁麼にして小が不恁麼、小の處に居れば小が恁麼にして大が不恁麼、——是非、長短、輕重、寒暖等

五

も同一筆法であります。

次に恁麼、不恁麼を禪宗的に提講致しますれば、恁麼と云うても眞箇許したのでなく、不恁麼と云うても眞箇許さぬのではありません。是は正師家の手元から云ふので、正師家は學者の胸中を一見辨見して、同一の一喝でも許す場合に用ゆることもあり、許さぬ場合に用ゆることもある。同一の三十棒でも、賞棒もあり罰棒もあります。要は學者そのものをして此事に到達、此事に徹底、此事に悟入せしむるにある。故に正師家の一言一句は、學者自身の淺見を以て是非を論じ、好惡を下すべきではありません。——見よ正師家が學者を相手にして法戰一

場する場合、(必ずしも學者相手と一定しては居らぬ、)向上に轉じ去ることもあり、向下に轉じ來ることもある。」向上に轉じ去るときは、釋迦でも彌勒でも文珠でも普賢でも、天下の宗師家は無論のここ、古今の英雄、東西の豪傑、及び宇宙間にある一切のもの、否、宇宙そのものも、氣を飲み聲を呑むに止めず、ウンごも、スウごも出來ぬ様に命根を斷絶せしむ。云ふ勿れ無慈悲ご。之是を眞箇の大慈悲ご云ふ。——若し向下に轉じ來るときは、醯鷄、蟻蝶、蠢動、含靈、目にも見えぬ、形も無き微細なる動物は固より、木でも石でも、水でも火でも、其他、無に類する纖埃に至るまで、總て一々大光明を放たしめ、悉く

一々壁立萬仞ならしむ。云ふ勿れ落草老婆と。之是を眞箇の活方便、云ひます。

向上に轉じ去るべきときは向上に轉じ去る、是がそのまゝ轉處に立在、—— 向下に轉じ來るべきときは向下に轉じ來る、是がそのまゝ轉處に立在、—— 箇々轉處に立在と云ふことは、敢て禪學者の專有でもなければ、無論專行でもありません。如何なるお人でも、如何なる物でも、箇々轉處に立在してをります。諸君の轉處立在は如何。—— 私の轉處立在は如何。—— 私の轉處立在は、こゝに提講して居ります。諸君の轉處立在はそこに聽講して御座る。何れを恁麼とも不恁麼とも決定は出來

ません。恁麼と云ふときは諸君も私も共に恁麼、不恁麼と云ふときは私も諸君も俱に不恁麼。—— 以上の理論は理論として、そのまゝ一場の閑言語とすれば、寧ろ罪がなくて結構であります。されど、我こそは、と思ふお人は絶對的方面に即せず、相對的方面に即せず、差別、平等、向上、向下、そのものゝ不即不離中に浮沈せず、超越の大機大用そのものを掌握し、眞箇悟了同未悟の境界に到達せんと欲するならば、條に依るか例に依らなければなりません。今幸に無條中の條、無例中の例があります。それは本則の睦州掠虛、それでありませす。速に去つて朝參暮請なさるべし。

◎本則

舉、睦州問僧、近離甚處、僧便喝、州云、老僧被汝一喝、僧又喝、州云、三喝四喝後、作麼生、僧無語、州便打云、這掠虛頭漢、

讀方

舉す。睦州、僧に問ふ、「近ごろいづれの處を離れたるぞ。」僧、便ち喝す。州云く、「老僧、汝に一喝せらる。」僧又喝す。州云く、「三喝四喝の後、作麼生。」僧、語無し。州便ち打つて云く、「這の掠虚頭の漢。」

本則の睦州は道蹤禪師のこと、陳尊宿、諱は道明、幼にして開元寺に往いて佛を禮し、歸り來つて父母に出家を請ひ、父母之を許して出家せしむ。師は持戒精嚴、學は經律論の三藏に通達す。黃檗の希運禪師に參ず。當時、臨濟禪師をして佛法的々の大意を三度黃檗禪師に問はしむ。三度ながら打たれ、臨濟禪師をしてそのなすところを知らざらしむ。師は黃檗に臨濟禪師の人となりを密啓して大愚の會下に轉參せしめて遂に大悟せしむ。師は希運禪師の法を嗣ぎ四衆の請に應じ觀音院、又は龍興寺に住居せらる。門下常に百餘人、諸方より敬慕さるゝこと佛祖に同じ、故に尊稱して陳尊宿と云ふ。——雲門禪師は師の惡辣手段に會うて、門闥に足を折り依つて大悟なされました。

師、法の爲に徹困なること概ね是の如し。師の他師に勝る其一節を擧揚すれば、好弟子を他に譲りて自ら取らざることであります。蓋し法あるを知つて身あるを忘れたるが爲であります。

開元寺に住せられた其時、草鞋を織つて母を養ふとあります。師は母を養ふに三寶物を費すことを恐れ、自ら草鞋を織り是を賣り、得たる金を以て母を養はる。故に師の手にて出来た草鞋を世人陳蒲鞋と稱し競うて是を買ひ取りました。彼の巢寇が睦州城に攻め來りし時、師の自ら織られし大なる草鞋が城門の前に懸けてありました。巢之を取り棄てんとして遂に力及ばず。依つて巢、歎じて云く、睦州城に大聖人ありと云うて、城を捨

て、去られました。世壽九十八、茶毘に附し去りし時、舍利雨の如しとあります。師は徳山禪師と同時代の人であります。

以上申し上げたるが如く、睦州禪師は出藍の稱ある機鋒銳利の老古佛、黃檗禪師の活手段そのまゝ、一摸に脱出、向上向下、臨機應變に轉じ去り轉じ來る底の法戦一場は、佛祖を驚かし鬼神を泣かしむる概があります。睦州禪師、僧に問ふ、近離^ニ甚處^ニと平凡極まる問端であります。私なども初相見のお人に對して常に、君はごここからお出でであります、と問ひます。されど睦州禪師の此問端は尋常底にして而して尋常底に非ず、近離^ニ甚處^ニ、ご云ふ其一句、僧の五臟六腑に曾て收藏しつゝあるお悟を

吐却せしむる一種の神薬であります。此僧、睦州禪師の探竿に依り、自己固有の一癖病を起して、カアーツと大喝一聲致しました。——此僧の一喝、虚喝か真喝か、將實喝か偽喝か、諸君參究して御覽なさい。——睦州禪師、向下に轉じ去りて曰く、老僧汝に一喝せらる。甚だ不調法を致しました平に御免下さい、と僧をして壁立萬仞ならしめ併せて光焰萬丈たらしむ。知るべし此中に陷虎の機あることを。——残念なことには此僧、睦州禪師が大悟徹底せしめん爲に慈悲徹困の手段を下されたことを覺らず、カアーツと大喝した其一喝を讚賞なされたこと、思うて、又カアーツと大喝を吐きました。(是必ずしも不可

ではありません。) されど睦州禪師曰く、三喝四喝の後、作麼生。汝は如何なる心底である。最初の一喝で一切事ずみであるぞ。然るに又しても、カアーツ、カアーツと連喝さるゝが、いつまでカアーツ、カアーツと云ふつもりか。——睦州禪師尙ほ向下に轉じ、その様にカアーツ、カアーツと喝を連發されては、拙僧の耳が、つぶれるのみか、汝の咽喉もいたむことであらう、と注意をされたので、此僧聊か自己返照、是は失策と氣がついて見るに、一言半句も返辭の呈し様がない、僧無語。——茲で彼れ是れと云うたら錯、更に大錯。——幸に此僧、大錯無きを、得たるは自己返照の賜であります。お互も常に恒に自己返照し、

て、無駄辯を費さぬ様に、無口は黄金、——言葉多きは品、少
 い。——睦州禪師、僧無語の端的を見て、茲ぞと間に髪を入れ
 ず向上に轉じ來り打つて云く、「這掠虚頭漢、」このウヌボレの
 大馬鹿め。——（僧はこゝで大悟すべきであります。果して
 大悟せしや。）恁麼は黄檗禪師が、臨濟禪師の如何是佛法的々
 の大意を問うた其刹那三十棒を下された。其機鋒と同一の筆
 法。——睦州禪師の睦州禪師たる眞の面目は茲に露出して居
 ります。諸君、睦州禪師の眞面目を拜見なされましたか。如何
 なる顔をしてお出ででありました。サア——云うて御覽なさい。

——是は失敬、失敬。——

◎頌

兩喝與三喝、作者知機變、若謂騎虎頭、二俱成瞎漢、誰瞎
 漢、拈來天下與人看、

讀方

兩喝と三喝と、作者、機變を知れり。若し虎頭に騎れりこ謂
 はゞ、ふたり俱に瞎漢と成らん。誰か瞎漢。拈じ來れ、天下、
 人と與に看ん。」

雪竇禪師、向下に轉じ吟出して曰く、「兩喝與三喝、作者知機
 變、」と本則の全部を一貫に拈出なされしは、例に依つて美事
 美事。」有名の睦州禪師は元より、無名の一僧も、雪竇禪師の

舌頭に鼓動せられて、一々壁立萬仞となり、一々大光明を放ちました。

問僧は問僧で喝すべき時に喝し、黙すべき時に黙す、睦州禪師は睦州禪師で向上に轉ずべき時には向上に轉じ、向下に轉ずべき時には向下に轉ず、可謂主客機變を知るぞ。——故に雪竇禪師曰く、作家作家。有名の睦州禪師は元より作家であるが、無名の問僧も又是大なる作家、ご口を極めて稱揚なされました。——雪竇禪師、その人も衲の立場から見れば一大作家にして機變を知ると云ふ點に至つては、敢て睦州禪師に譲らずであります。雪竇禪師は餘才を以て重吟して云く、「若謂騎虎

頭、一俱成瞎漢」と向上に轉じ來り、若し問僧騎虎の勢に乗じ、睦州禪師の注意を耳に入れず、野猪的に自己の欲する儘、喝し去り喝し來りなば、機變を知らざる不作家の瞎漢。——睦州禪師その人も問僧の無語底に對し打つて云く、「這掠虛頭漢」ときめつけなければ、法窟の爪牙を持たざる一箇尋常の凡僧にして作家ごころか念入りの瞎漢。——恁麼の如く雪竇禪師は睦州禪師及び問僧をして氣を飲み聲を吞ましむ。——されど賊入空城で、そこらあたりに睦州禪師も問僧もをりません。——流石の雪竇禪師、聊か忘前失後底。故に言を改めて曰く「誰瞎漢、」——睦州禪師既に瞎漢に非ず、問僧も又瞎漢に非ず、果

して然らば誰人が瞎漢。——瞎漢ご云うて不具者のこと、思ふまいぞ。忌憚なく云へば三世の諸佛、歴代の祖師、何れも瞎漢である。既往は語らず未到は問はず、現今、即座、刻下、誰瞎漢。——雪竇禪師、畢竟何人を指して斯く云はる。來つて是非を説く人は是れ是非の人なりで、豈圖らんや誰瞎漢ご云はる、其瞎漢は雪竇禪師其人であります。抑下したならば、さすがの雪竇禪師も氣を飲み聲を吞まずには居られますまい。——誰瞎漢、——さすれば眞箇の瞎漢は盡天地、盡乾坤、盡十方に於て未だ曾て是れあることなし。幸に絶無に近き眞箇の瞎漢あらば、實に奇中の奇、怪中の怪で、所謂、掘り出し物。一箇の

私用品となすこと勿れ。天下一般の人に附與して氣隨意、氣儘にお見せ申すご共に私も充分近傍して拜見致しませう。諸君絶無に近き眞箇の瞎漢を拜見しましたか。見るごき見えす暗昏々。

——恁麼々々、諸君も衲も共に壁立萬仞、——不恁麼不麼、衲も諸君も共に氣を飲み聲を吞む。——氣を飲み聲を吞むも瞎漢、壁立萬仞も又瞎漢、瞎漢々々到る處瞎漢ならざるなし。信ぜずや、玄沙云く、世界は沙門の一隻眼、ご。——

喝につき聊か臭口を開いて見ませう。喝に眞喝偽喝、虚喝實喝あるが如く、生喝死喝、奇喝靈喝があります。左に記憶の一二を記して同火の諸子に示します。

「心越禪師は、明から渡來なされた歸化僧、多藝多能、所謂、口も八丁、手も八丁に發達してお出でになる大人格者で、氣品高潔、資性溫雅、行住坐臥、如法綿密のお方であります。水戸光圀公は、日頃から何とかして心越禪師の大度量を試みんものと常に思つて居られました。或日、侍臣と豫め謀を籌し置き、酒筵を設け、禪師を招待し、光圀公が呈した盃を禪師が將に口にせんとする其刹那、轟然一發「ズドーン」と筵席の側から大砲を發射させました。氣の小さいお酌の小姓共は、前から聞かされて居ながら、喫驚して銚子を抛り出した位であるにもかゝらず、心越禪師は、硝煙濛々と立罩めた其中に於て、神色

自若こして少しも動ぜず、手にした酒杯の海には縮緬の皺程の小波さへ起さず一口に吸盡なされました。——そこで光圀公、いと丁寧に、その戲なることを述べ、無禮の謝罪をなされました。禪師は聊も意に留むるけしきもなく、曰く、いや、砲聲は武門の習で、御座れば、別に御斟酌には及び申さぬ、と徐ろに乾しました酒杯を公に返上し、やがて光圀公がこれを手にし、將に口にせんとせらるゝ其時、禪師、「カアーツ、」と天地も碎くるばかりの大喝一聲、光圀公は驚いて思はず酒盃を取り落し、お酌の小姓は腰を抜かし、満座の者は青くなつて慄へ上りました。(此喝は眞喝であり道喝であり實喝であります。) 然るごき禪師

は、平然、涼しき顔をして、いや、棒喝は、禪門の常で、御座れば、別に斟酌は致しませぬ、と云うて微笑なされました。この事あつて以後、光圀公は心越禪師に對して眞箇心服の度を一層深くなされました、ごあります。

支那の蘇東坡が禪に凝つて、慢心で腹一杯の頃、荆南に皓禪師と云ふ名僧がありました。此禪師、これ程の禪力を所持して居るかを試み見んものと、或日、蘇東坡は、小役人の風を装うて皓禪師の門を叩きました。皓禪師、蘇東坡に會うて先づ問うて曰く、「お前の名は何と申します。」東坡曰く、拙者の名は秤と申します。「フウ、珍しいお名である、と云ひつゝ、禪師は、しき

りに小首をひねつてをらるゝと、東坡は、さもこそと膝を進めて、「私の名は、天下の禪師達の器量を秤る別名であります、と兩肩を聳かし丈高になりました。其言葉の未だ終らざるに皓禪師、腹の底から聲を絞つて「喝——」と大喝一聲しました。蘇東坡は、覺えず喫驚して跳び上りました。すると皓禪師、徐に微笑しつゝ曰く、「一喝の重さ幾斤かある、速に云へ、速に云へ、と膝を進められました。流石の高慢ちきの東坡も、冷汗背に流れたと云ふことでもあります。知るべし、皓禪師の一喝は眞喝にして實喝、而して法喝であり道喝であることを。茲に古來秘藏の一喝あり諸君に進呈せん。諸君、近前來。——

一喝二喝三四喝、五六七喝八九喝、喝來喝去喝亦喝、喝喝喝、喝喝喝、」是は臨濟門か。

一棒二棒三四棒、五六七棒八九棒、棒來棒去棒亦棒、棒棒棒、棒棒棒、」是は徳山門か。

棒を要するときは喝が棒となる、南枝は暖に向つて開き、
鶏寒上木。

喝を要するときは棒が喝となる、北枝は寒に向つて開かず、

鳴寒入水。

是なるときは是、——非なるときは非、——是も是ならざるときはあり、非も非ならざるときはあり、畢竟如何。梅尾の明

惠上人は、鎌倉三代の執權職北條泰時の歸依淺からざりし華嚴宗の大徳、或時何處からか鹿が一匹這入つて來て庭の草を食つてゐるのを見た上人は、何と思つてか、「あれく、彼處へ鹿が這入つて來た、早く打て早く打て、」と平常は極めて優しい上人が、今日はごうした事であらう。若しや氣が狂つたのではなからうか、と眉を擡めて囁き合つた。上人は之を聞いて弟子達に對して左の如く云はれました。

「納は、たゞ鹿を人に馴れさせまいと思つて追つたのぢや。鹿が人に馴れて里に度々出て來るやうに相成らば、遂には人命を取られて了ふであらう。それが不愍さに追つたのぢや。」

(是が上人の一喝。) 弟子達は此の言葉を聞いて、今迄自分等の徳の至らず考の浅かつたことを深く恥ぢり入つた。」と云ふことがあります。—— 之是の閑葛藤は尋常一様の閑葛藤に非ず。諸君、入念更に入念して御注意に御注意を願ひます。恁麼の閑葛藤の中に甚深微妙の一飽能く萬劫の饑を消する底の妙味があります。翫味すべし、翫味すべし。至囑至囑。」——

(以上昭和十一年十二月十二日講演)

第十一則 黄檗墮酒糟漢

黄檗禪師が母上を引導なされた渡し場を大義渡と申します。其大義渡に、毒海慈禪師が左の如き詩を吟じられました。詩に濯足機先被熱瞞、黄金之義鐵心肝、十成報德酬恩句、萬古一江風月寒。」

黄檗禪師得道の後、父母を省せんと思ひ、行いて閩中に到る。一婆子あり、出でて問ふ、「何れの處よりか來る、」と。師曰く、江西より來る。婆子曰く、我も亦一子あり、出家して江西にありて多年歸らず。師因つて宿を借る。婆子親しく爲に足を洗ふ。師、足中一痣あり、甚大なり。婆子はれ我子なるを記せず。次

の日師辭し去る。三里外に到つて郷人に逢ひ、説いて曰く、吾母山僧を忘却して識らず、然れども歸郷一見せば足りぬ。」郷人之を其母に報ず。母趕うて福清渡に至る。師已に登舟す。母江に赴き脚を失して沈溺して死す。師岸を隔てて炬を乗り法語して曰く、一子出家九族生天、若不生天諸佛妄語、と云うて炬火を擲つ。時に兩岸の人、婆子火焰より轉じて男子となり大光明に乗じて夜摩天宮に轉生するを見たり、と。」起句は、禪師が母親に足を濯うて頂く時の心中。承句は、母親の恩誼は黄金の如く、愛情を切斷する禪師の心肝は鐵の如し。轉句は、一子出家九族云々。結句は、不生不滅の當體を、毒海慈禪師が第二の黃

檠禪師となり、萬古一江風月寒、と喝破されたのであります。

◎垂示

垂示云、佛祖大機、全歸掌握、人天命脈、悉受指呼、等閑一句一言、驚群動衆、一機一境打鎖敲枷、接向上機、提向上事、且道、什麼人曾恁麼來、還有知落處麼、試舉看、

讀方

垂示に云く、佛祖の大機、全く掌握に歸し、人天の命脈、悉く指呼を受け、等閑の一句一言、群を驚かし、衆を動かし、一機一境、鎖を打し、枷を敲き、向上の機を接し、向上の事を提ぐ。且く道へ、什麼人が曾て恁麼なりしぞ。還落處を知

る有りや。試みに擧す看よ。」

「佛祖」は、三世の諸佛、歴代の祖師。「大機」は、活機輪、活動作、活手腕。「掌握」は、手の中に握る、言を換へて云へば、殺すも活すも、與ふも奪ふも、お手次第。「人天命脈」は、人間界、天
上界、そのもの、生命、そのもの、死活、そのもの、呼吸。「指呼」
は、指揮、指導、指示、命令。「等閑一句一言」は、平生底の言
語、例せば、朝のお早う、晩のおやすみ。「打鎖敲枷」は、迷ひ
の鎖悟りの枷、それを打ち切り、それを敲ちとること。「接向
上機」は、尋常ならざる超越の人。「提向上事」は、絶対の活機
輪、非常の活作略。「落處」は、唐、宋時代の俗語、結論とか歸

着點と云ふが如し。

以上は垂示にありし文字の略解、改めて申す迄もなく、垂示
は本則の前提であります。故に垂示の總ては本則の主人公、黃
檗禪師その人についてであります。されど圓悟禪師は、黃檗禪
師を主とし、自己自身、そのものを兼て舌頭を弄して御座るこ
とを忘れてはならぬ、こは云ふもの、黃檗禪師や圓悟禪師のみ
と思ふべからず。自己に向つて會せざれば、什麼の處に向つて
會せん。——各自、自己の立脚地を失却せざる様に注意が肝
心であります。

敢て黃檗禪師、その人に限つた事ではありませんが、流石臨

濟禪師のお師匠様だけあつて、佛祖の大機大用を掌中に握り、宇宙間に生存する一切のものを心のまゝに使用せらるゝ其活手腕は、實に恐れ入つたものであります。(佛祖の大機、そのものは菩提心より發したるもの、それが眞の大機である、若し菩提心、そのものより發せざる事柄は、如何に山岳を震動さすこと雖も佛祖の大機に非ずして、妄想の亂動、煩惱の盲動、見るに足らず、執るに足らず。)平生底の一句一言が悉く金科玉條、平生底の一機一境が總て金聲玉振。——故に如何なる人も恭敬し、尊信し、渴仰せざるなし。——若し衲なまが言を信ぜざれば、親しく黃檗禪師に參じ來れ。黃檗禪師が無造作に吐

かれた其言葉、——無意義になされた其動作、——能く人を殺し、能く人を活す、活して活した痕を止めず、殺して殺した跡を残さず、可謂、打鎖敲枷の妙手好手家也。——千斤の物を量るには、千斤を量る力あるものを用ひざるべからず。若し千斤の物を量るに、千斤を量る力あるものを用ひざれば、千斤の物、既に千斤の價を出す能はず、それを量る其人、對境の知識なきが爲に、總ての計劃が徒勞に屬す。故に苟も法幢を建て宗旨を舉揚なさる人は、彼を知り、我を知り、一機、一境、一句、一言、輕舉盲動すべからず。見るべし、黃檗禪師の如きは、——超人越格の人を接す知るべし、圓悟禪師の如きは、——

るときは、拔群非凡の人に對するときは、腦後に針を添へる、こ
とあり、骨を敲き髓を出す、こゝあり。之是を向上の機を接する
に、向上の事を提ぐと云ふ。——云ふ勿れ黃檗禪師であれば
こそ、——云ふ勿れ圓悟禪師であればこそ、こ。お互は黃檗
禪師以外の黃檗禪師、圓悟禪師以外の圓悟禪師である。彼のな
せしこと、我のなし得ざる道理なし。要は菩提心の有無如何に
あるのみ。眞箇宗旨の眼目、眞箇此事の要點、眞箇黃檗の主意
を覺得せんご志ざす漢は、速に去つて本則に入り黃檗禪師の爲
人度生底に參すべし。

從容錄にある萬松老人の此則に對しての垂示は至つて簡單に
して極めて要を得てをります。故に茲に記して同火の一覽に備
へます。曰く、「臨機不見佛、大悟不存師、」我が禪門の他宗
教に超越して居る所はこゝだ、大象は兔徑に遊ばず、大悟小節
に拘らず。「定乾坤劍沒人情」菩提心より發した行爲である
ならば、人情を没するも敢て妨げざるのみか寧ろ賞讃すべきで
ある。「擒虎兇機忘聖解」圓悟の所謂、接向上機、提向上事、
それでありませす。時に依り、場合に臨み、釋迦聖人の解釋を違
守せずして禁戒を犯す、こゝがある。知るべし、犯すが犯すに非ず
して却つてそれが守ることになる。——「且道是甚麼人作略、」
斯の如き大機大用の活作略をなせし人は誰人ぞ、と云うてあり

ます。」可謂、舌頭無骨、——如何にも我等の云はんと欲する處を萬松老人は既に語り盡せり。

◎本則

舉、黃檗示衆云、汝等諸人盡是噎酒糟漢、恁麼行脚、何處有今日、還知大唐國裏無禪師麼、時有僧、出云、只如諸方匡徒領衆、又作麼生、檗云、不道無禪、只是無師、」

讀方

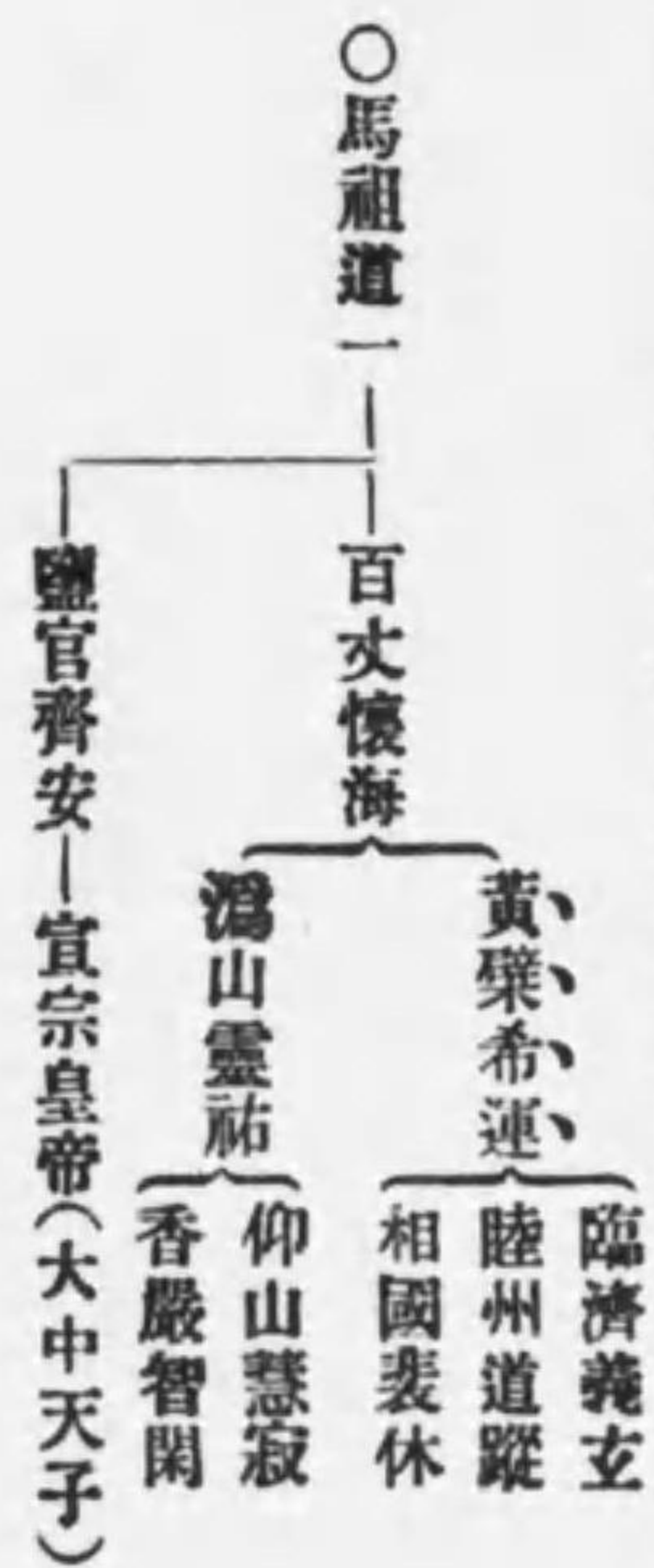
舉す。黃檗、示衆して云く、「汝等諸人は、盡く是れ噎酒糟の漢なり。恁麼に行脚せば、何れの處にか今日有らん。還大唐國裏に禪師無きを知るや。」時に僧有り。出でて云く、

「只諸方の徒を匡し、衆を領するが如き、又作麼生。」檗云く、「禪無しとは道はず、只是れ師無し。」

黃檗、是は植物の名稱、「キハダ」の木のことでもあります。其「キハダ」の木が澤山にある山、故に黃檗山と云ふと井上君は云はれました。其山に寺が建立されてゐて黃檗山萬福寺と云ふ(元の名は建福寺)。福州の福清縣にありと傳聞して居る。此黃檗山萬福寺と一つ山を隔てた處に、一指頭の禪で有名な俱胝和尚の寺がある。相變らず一指を豎てた俱胝和尚の木像が、本堂に構へて居ると云ふ。永年の間、御苦勞に一指を豎てて、御座るごは、世の變遷に迂なる俱胝和尚である、ご衲は引導を渡し、

て、やりたい。

黄檗禪師は、傳記に「額間隆起して肉珠の如く、音辭朗潤、意志冲澹、ごあります。天然的に禪機を帯び、自然的の偉僧である。聞く處に依れば、滄山靈祐禪師と同年に生れ、趙州從諗、德山宣鑑、柳宗元、白樂天、韓退之、なぞご同時代だご云ふことである。黄檗希運禪師の法脈は左の如し。（井上君の説）



初めて禪師百丈禪師の許に到るや、百丈問うて曰く、「巍々堂々として什麼の處よりか来る。」檗曰く、「巍々堂々として嶺中より来る。」丈曰く、「何の事の爲めぞ。」檗曰く、「別事ならず。」（此別事ならずが、即別事である、諸君おわかりか。）百丈之を聞いて深く法器ごなす。可謂、百丈禪師は人を見る眼目を具する人ご。——次の日、百丈を辭し去らんごす。丈曰く、「什麼の處にか去る。」檗曰く、「江西に馬大師を禮拜し去らん。」丈曰く「馬大師已に遷化し去れり、」と注意し、自ら曾て馬大師に參じた時の因縁を舉揚せられた。菩提心の化身ごも云ふべき老婆親切、云ふ勿れ落草談ご。「我馬祖に參ず、祖我の來るを見て便ち

拂子を豎起す。我問うて曰く、「此の用に即するか、此の用を離るゝか。」祖遂に拂子を禪床の角に掛けて良久、——祖却つて我に問うて曰く、「此の用に即するか、此の用を離るゝか。」我拂子を持って禪床の角に掛けた。其時、祖は振威一喝を浴せられた。爲に三日の間聾になつた、——と語るや、黄檗禪師は覺えず慄然として舌を吐かれた。それを見て百丈曰く、子已後馬大師に承嗣するや、と。檗曰く、然らず、今日師の親切に因つて馬大師の大機大用を見得ず。若し馬大師に承嗣せば、他日已後、我が兒孫を喪せん。丈曰く、如是如是、見師と齊しき時は師の半徳を減ず、見師に過ぎて傳授するに堪へたり、子が今の見處

宛も超師の作あり、と。(知るべし、面授面稟の大切なることを。) 黄檗禪師、天台山に遊ぶ。路に一僧に逢ふ。是を見るに眼光人を射り、頗る異相あり。談笑しつゝ、偕に行く。偶々溪水の暴に漲るに會ふ。檗、杖を立て笠を取りて休すること多時、其僧、師を率ゐて同じく渡らん云ふ。檗曰く、請ふ先づ渡れ。彼即ち衣を褰げ波を躡むここ平地を履むが如し。回顧し招いて曰く、渡來渡來。師咄して曰く、這自了の漢、吾早く捏怪なることを知らば汝が脛を斫るべし、と切齒された。それを聞いて其僧、歎じて曰く、真に大乘の法器なり、と云ひ訖つて見えす。恁麼は羅漢が化して僧となり黄檗禪師を點見した、と云ふ。果して然

るや。果して然らば、黄檗禪師、正念不相續のあるあり。

或は後人が黄檗禪師、其人を更に偉大にせんが爲めに紅粉を加へしものか。

—— 檗禪師に深く歸依して居る裴相國が禪苑を建て、禪師を請じ、所解一編を呈す。禪師之を少しく披閱し、良久して曰く、會すや。裴曰く、不會。禪師曰く、「斯くの如きもので會得出来れば苦しむに及ばぬ。」又曰く、「眞の所解は紙墨にて表はされるものでない。」玆に於て裴相國、頌を以て賛して曰く、自從大士傳心印、額有圓珠七尺身、掛錫十年棲蜀水、浮盃今日渡漳濱、八千龍象隨高步、萬里香花結勝因、擬欲事師爲弟子、不知持法付何人。」と大いに賞讃せられたが、禪師は

一向喜ぶ氣色もなくして、心如大海無邊際、口吐紅蓮養病身、自有雙無事手、不會祇揖等閑人。」と答へ其禪苑に住し例に依りて機鋒孤峻、會下より一宗の開祖たる臨濟義玄禪師を打出された。—— 餘は略す。

唾酒糟漢は、唐、宋時代の俗語、圓悟禪師曰く、「唐時愛罵人、作唾酒糟漢。」愛して人を罵るならば、惡意で罵るのでなく、善意で罵ることになる。されど、苟も罵るには善意で罵ることは聊か腑に落ち兼ねる。然れども俗に云ふ、遊戯半分、眞劍半分、それが唾酒糟漢と云ふここに當るかも知れません。何れにせよ、罵るには相違なし。—— 「行脚」は、禪僧が此事研究の爲に諸方

を遍歴し正師家に參禪すること。——「何處有今日」は、今日
 こそは大安心の日のここ。近來傳得安心法、萬壑松風枕上聞、こ云
 ふ好境界、それが今日あるのであるから、依然として不安心。

——「無禪師」は、廣い世界と云ふが、一箇半箇、是はご賞讃す
 る程の禪師があるか、東を見ても西を見ても、掌中の玉を失却し
 て、天上の月を貪る底の禪師のみである。——「匡徒領衆、」

「匡」は、教育、薰陶の意、「領」は、統一、總理の意、匡徒領衆と
 は、教育に従事して居ること也、と井上君は云ふ。衲も共鳴しま
 す。——「不道無禪、只是無師、」禪には師がない、それを云う
 たのだ。師とは何ものなるか。只可自怡悅、不堪持贈君、——

黃檗禪師は、百丈の法嗣にして、馬祖の孫で、唐の宣宗皇帝よ
 り斷際禪師の謚號を賜つた没量大の大機大用を隨處隨時に活轉
 なさる禪界の大偉人、特に此本則は大機大用中の更に大機大用
 であります故に、古人曰く、岩頭最後の句よりも最も苦きは、黃
 檗禪師の只是れ師無しの一着子なり、と眞に然りである。——

如是機鋒孤峻、如是電卷雷走、如是腦後拔箭、如是鎖斷要關底
 の黃檗希運禪師が全身に全力を入れ、大音聲を張り揚げ、「汝
 等諸人盡く是れ 唾酒糟の漢、恁麼に行脚せば、」と云はるゝ其
 聲を聞き、其顔目を見たならば凡僧は無論のここ、三世の諸佛、
 歴代の祖師と雖も、氣を飲み聲を呑むより外に如何ともなす能

はずである。—— 衲は黄檗禪師が恁麼の垂示をなさる其時に遭遇せざるが、何よりの幸であります。現今本に記してある黄檗禪師の此則を昔話として拜見したゞけでも總身白汗が流れます。況んや黄檗禪師其人に親しく恁麼の大獅子吼を實際に聞かされたら、喪身失命は到底のがるゝここは出來ますまい。それを思へば禪師に遭遇せざるが不幸中の大幸であります。—— 衲は黄檗禪師に代つて現今の大衆に申します。曰く、汝等、能く、そろひもそろつて、酒の糟ばかり喰つて居て、本統の正宗や白鷹、又は松竹梅、忠勇の味を知らない奴等だ。(酒の糟は、心外の事業、又は一切の言句。) 今日は一層、酒の糟喰ひが

多い。—— 黄檗禪師の此の御垂示は、今日の時代に適切なる晴天の霹靂、特に宗教家教育家、その人に對して頂門上の大鐵槌であります。—— 何れの處にか今日あらん。直に自己心向上に向つて根源をきわめずして、西洋はごうの、東洋はごうの、やれ米國が、—— やれ佛國が、—— なごと徒に枝を折り葉を尋ね、東奔西走、—— 酒の糟ばかり喰うて、眞箇酒の生粹を知らざる者は、行脚修行に何百足、鐵の草鞋を踏破しても、要するに無駄骨折り、決して大安樂、大安心の境界に到達するご云ふ今日はないぞ。愧を知れ、—— 愧を知るべし。愧を知れば、仁に近し、又勇に近し。—— 愧を知らざれば一生涯、浮ぶ

瀬はない。——大唐國裏に禪師無きことを知るや。一體汝等は此大唐國、支那四百餘州を南去北來して禪師を求めて居るが馬鹿も馬鹿も念の入つた大馬鹿ものだ。大唐國は愚か三千大千世界を鐘太鼓を鳴らし血眼で探しても、眞の禪師は只の一人も居らぬ。汝等は恁麼の道理を知らぬから多額の學資を投じ行脚するのであらう。畢竟勞して功無し、よせよせ、ご黄檗禪師は、がらにもない馬鹿親切に臭口を弄せらるゝが、其ウロ／＼する奴等の横面をビシャー／＼やつて呉れ、ばよいに、ご或人は云うて居らるゝ。尤も千萬。されど今は遅八刻。——時に僧あり、出で、云く、「只諸方の徒を匡し衆を領ずるが如き又作麼生。」

酒の生粹を味うたことのない噎酒糟の代表者が、酒の糟に酔うて、蹣跚たる足つきで大衆の中よりムックと出で來り、「只今老大師は大唐國裏に禪師無しと言はれますが、御覽なさい、現に大衆を集めて獨參を聞いたり提唱したりして居らるゝ禪師は、江南江北、到る處に綺羅星の如く粲然と道光を放つて、それは／＼盛大であります、」ご黄檗禪師の垂れられた鈎に懸つて來ました。

黄檗禪師が大唐國裏に禪師無きことを知るや、ご云ふ其心底は決して雲居の羅漢を氣取つて、大唐國裏の禪師方を罵倒したのではありません。仁に當つて師に譲らず、義を見て爲すに勇

む底の大鯨を欲したのであつた。然るに大鯨でなくして小魚。

——されど、無きにまされり。

——槩曰く、「禪無し」は道は

ず、只是れ師無し。」之是の一語が本則の眼目、小魚たりと雖も、
 鉤に懸つて來なければ、流石の黃檗禪師も満面の慚惶でありま
 す。幸にも、否、不足、不充分ながらも、問僧のおかげで、黃
 檗禪師、自己胸中の千萬分の一を吐露することこの出來たは、意
 外の拾ひものであります。——普通の人には、「禪無し」は道は
 ず只是れ師無し、」と云ふ此語を解して「禪理は、萬物の存在せ
 ざる以前より、それが破滅する以後を一貫し、大宇宙に遍滿し
 て居る。故に禪無しと云はぬ。然れども禪を修して人天の師と

なる大善智識が天下に幾人居るか、實の處を云へば寂々寥々で
 一人もないと云うても過言ではあるまい、と云はるゝ。——
 無論恁麼の説をなす人は門外漢であります。門内の人にしても、
 「師無し」を左の如くに思うて居る人がある。曰く、禪と云ふも
 のは師匠は無い。自知自得にある。法の根本たる向上の事に到
 ると他より傳へたり他に與へたりすることは出來ぬ。佛法と云
 ふものは、唯自知自得するより外に手段はない。全體何ごとも
 極所に行くと無師、妙處は決して教へられぬ。「門より入るもの
 は家珍に非ず」云々。此の説も黃檗禪師の心底を洞觀したごは
 云はれませんか。——故實全師は、「師無し」と云ふ此一句、これ

が奪命の神符で實に怖い、人々の腕前で薦取せよ、と云うて黄檗禪師の蔭に隠れられた。——故宗演師は、無師の一句は吾宗の生命、六王畢つて四海一なり、蜀山兀くわつとして阿房出づ、——憐むべし、楚人の一炬に焼土となりぬ、是が分つたら黄檗の腹が見えやう、と云はるゝがなか／＼其様なところで黄檗禪師の腹ごころか影も見えない。——飯田君は、自己碧巖提唱録に、日本本の黄檗を氣取り、昭和の希運禪師となりて曰く、今の叢林に正師のないのは殆んど天下の輿論となつてをる。僧堂の改良論をいくらやつても、正師なければ錦に毒石を包むやうなもので、徒勞をまぬかれぬぢやが、正師がないからと言つてそのま

ゝにしてはおけぬ。おけば大法はそのまゝ滅亡ぢや。世界は直に黑暗地獄と化せねばならぬ。ごの手にしても正師を作らねばならぬ、人々正師とやらねばならぬ。菩提心の下に大勇心を振つたら何事が成らざらん。正師の有無は菩提心の有無に關する云々と云うて居らるゝが、如何にも、如何にもである。恁麼は飯田君の見識、——衲なまは衲なまとして更に見所のあるあり、曰く、禪無し、道はず、只是れ師なし。——

◎頌

凜凜孤風不自誇、端居寰海定龍蛇、大中天子曾經觸、三度親遭弄爪牙、

讀方

凜凜たる孤風、自ら誇らず、寰海くわんかいに端居して龍蛇を定む。
 大中の天子、曾て輕觸けいさくし、三度、親しく爪牙を弄するに遭ふ。」

起句に向つて故實全師曰く、精銳、頗る眞贛に逼る、黃檗を見んご欲せば此の句に參ぜよ、此句の妙は自ら誇らずの三字に在り、」ご、如何にもであります。金箔莊嚴で飾り立てたのご異り、裸一貫の儘、それで威ありて猛からず、恭しうして安しの風彩がある。孤風自ら誇らず、是は黃檗禪師の專有にして又專賣特許であります。承句は、天外に出頭し來り、凡聖、龍

蛇、一切の事々物々を眼中に入れ、一々點見し、寸毫も過失なき鑑定ふりは宇宙に於て黃檗禪師一人のみである。「大中天子、」唐の宣宗皇帝の書生時代、香巖智閑禪師の會下となり禪の修行をなされました。或日、智閑禪師、大中天子の志、那邊にあるかを試みんが爲に、盧山に遊びし因ゆゑに、瀑布に題して、穿雲透石、不辭勞、地遠方知出處高、」ご二句を吟じ佇思すること久しうして居らるゝご、大中天子轉結を續けて曰く、溪澗豈能留得住、終歸大海作波濤、」ご吟じられました。智閑禪師、之を聞いて尋常の志を持する人に非ざること黙識されました。智閑禪師、大中天子を請じて書記の役に推薦しました。(禪堂内の書

記) 衲たが聞きおぼえの歌に、往く末は海となるべき溪川も、しばし木の葉の下くゞるらん。」と云ふのがあります。思ふに大中天子の吟じられた溪澗豈能云々の意を採りて作りしものならん。——「曾、輕觸、」輕觸は、「一寸ちよつせからかつて見た、」と云ふ位の意であります。黄檗禪師、平生の行持は只禮拜、禮拜と云うても、徒に三拜九拜する儀式的ではない。「能、禮、所、禮、性、空、寂、自、身、他、身、體、無、二、」是の如き禮拜でなければ眞の禮拜ではありません。世間で現在、行持なさる禮拜は米搗虫の禮拜、頭ご腰を曲げたり動かしたりするのみで禮拜のまねであります。(智閑禪師の會中で大中天子は書記、黄檗禪師は首座。) 禪師例

の如く佛前に於て禮拜。大中是を見て問うて曰く、元來禪は、佛に著いて求めず、法に著いて求めず、僧に著いて求めず、ごある。然るに貴僧禮拜して何を求めなさる、ご詰じりました。するご禪師曰く、佛に著いて求めず、法に著いて求めず、僧に著いて求めず、常に禮拜すること如是。(此如是の二字、百味具足す、眞に味ふべし。) 大中云く、禮を用ひて何かせん。求むる所がなければ禮拜は無用ではないか、ご突き込みますると、禪師無言のまゝ、大中の横面をイヤと云ふ程、平手でビシヤリとやりました。黄檗禪師の眞面目露堂々であります。御殿育ちの大中、泣面をして曰く、「大庵生。」亂暴なことをなさるな。禪

師曰く、此の場合亂暴だの親切だの言つて居る時ではない。ご云うて再びビシヤリごやりました。如何にも亂暴に近い。

——大中天子、目を廻して倒れたかも知れません。されど、大中天子も、禪師の凜々たる高風の爲に、多少の所得はあつたことでありませう。大中天子、國位を繼ぐや、黄檗禪師に號を鹿行沙門と賜うた。後更に斷際と改むごあります。以上が「曾輕觸」の由來、次の三度親遷弄爪牙、別に説明するに及びません。

重ねて申します自ら誇らずして凜々たる處が、黄檗禪師の全身、その誇らざる處が眞箇に佛祖の大機を掌握したる證據であ

ります。敢て傲慢する必要はない。敢て氣取る必要はない。平生底のまゝ、尋常底のそれが黄檗禪師その人の凜々たる孤風にして自ら誇らざれども、自然に人をして敬服せしむるのである。お互も斯くなりたきものである。斯くならねばならぬ。——

金剛眼を具して居らるゝ黄檗禪師が、三千大千世界の中央に獨坐して、人天の總てをして心服せしめ、眞偽の辨別しがたき龍蛇を、即時に分明ならしむる、其一句一言、其一機一境、蓋し何人も及ぶ能はざる超佛越祖の活機輪にして、天然禪機の獨露であります。何人も天然の禪機を具足しながら、何故に流露し得ざる。他無し自ら誇るが爲めなり。——流石、鑊湯爐

炭吹教滅、劍樹刀山喝便摧、こ云ふ凜々たる孤風の御主人公だ
 けあつて、全身菩提心あるのみ。故に總ての行持が悉く菩提心
 それのみ。眼中、佛祖あるを見ず、況んや王公貴人に於てをや、
 未だ曾てあるを見ず、大中天子輕觸するが爲に、三度爪牙を弄
 するに遭ふは固より理の當然であります。若し黃檗禪師をして
 菩提心全部の大機大用を忌憚なく現前せしめば、盡十方法界、
 乃至山河大地、一切が禪師の面前に平伏して、命を乞ふのみ。

——云ふ勿れ、賊、賊を知ること。——「高きこて油斷をする
 な富士の山、時々あたま、はる風ぞ吹く。」坐斷春風不_レ放高、
 こ天童禪師が、黃檗禪師唾酒糟漢の則に頌_じられた其結句であ

ります。書して修行者の一覽に供す。畢竟如何。善哉觀世音、
 全身入荒草。

(以上昭和十一年十二月二十六日講演)

第十二則 洞山麻三斤

一、枝、一、彌、勒、—— 一、葉、一、釋、迦、—— それに相違ありません。金剛正體是非外、鶉噪鴉鳴無了時、固より然りであります。されど、到得歸り來るに非ざれば眞箇の佛は知れません。事實の正體は手に入りません。故に條に依るべし例に隨ふべし。

◎垂示

垂示云、殺人刀、活人劍、乃上古之風規、亦今時之樞要、若論殺、也不傷一毫、若論活、也喪身失命、所以道、向上一路、千聖不傳、學者勞形、如猿捉影、且道、既是不傳、爲什麼、却有許多葛藤公案、具眼者試說看、

讀方

垂示に云く、殺人刀、活人劍、乃ち上古の風規にして、亦今時の樞要なり。若し殺を論ずるも、也一毫も傷つけず、若し活を論ずるも、也喪身失命せん。所以に道ふ、向上の一路、千聖も不傳なり。學者形を勞すること、猿の影を捉ふるが如し。且く道へ、既に是れ不傳なるに、什麼としてか却つて許多の葛藤公案有る。具眼の者は試みに説く看よ。」

「殺人刀、」は消極の動作、破壊の場合、否定の見解、禪學上では奪ふ云ふ。—— 「活人劍、」は積極の活動、建立の意義、肯定の見處、禪學上では與ふ云ふ。—— 「風規、」は宗風、宗

規、風習、風儀、規則、規範の意味である。——「樞要、」は必要の處、緊要事件、又は必須條件の事。——「若論、殺也、不傷一毫、」は、是を死中に活ありと云ふ。無論無形、精神上の事。——「若論、活也、喪身失命、」は是を活中に死ありと云ふ。有形上の肉體のことでなし。殺、活は廣く一切の事物、總ての上に於て、把放、與奪、卷舒、權實、理事等を含蓄して居ります。——

「向上、一路、千聖不傳、」は聲前の一句、未生以前の面目、

—— 絶對の眞理、—— 神の實體、—— 或は一原、—— 何

れにせよ、體驗すべきもので、口舌や筆端では到底、眞意、妙處は、受けることも、與ふることも出来ません。—— 其以心傳

心底を表して千聖不傳と云ふ。眞箇の禪學者は、此の不傳底を自由自在に、與へもし受けもする。—— 「勞形、」は無駄骨折り、勞して功なし。—— 「如猿捉影、」は証道歌には、「水中に影を捉ふ、争でか拈得せん、」ごあります。月の本體は天上にあり、水中にあるは、其影、猿公奇才ありと雖も、如何せん其知、人間に及ばず、天上の月を貪り見て掌中の玉を失却するでなく、月は水中にあるものご確信して、月影把捉の爲に貴重の一命を捨てたと云ふ、」それに類似したる人間の馬鹿ものも澤山ある。—— 猿公を笑ふことは出来ぬ。特に、禪學者に、多い。

「許多、」は數多、澤山のこご。——「葛藤公案、」の葛藤は禪家の術語で、文字言句、又は議論、理窟、總ての猿引道具を云ふ。——公案は禪家一流の禪學修行の紋切形、古來より一千七百則と云うて居る。されど眞箇の公案は、其人其人、其世其世、其時其時無量無數である。

圓悟禪師、例に依つて例の如く本則に對しての垂示、苟も禪家者流にして人天の大導師を自任する者は、殺活自在の金剛王寶劍を持し、與奪自由底の活手段を臨機應變に實行すること、禪門歴史上、上古の風規にして、無論今時も動かすべからざる樞要であります。」殺人刀、活人劍、狭く云へば、妄想分別

の根源を截斷する、それが殺人刀。」分別の根源を截斷すれば、法に於て自由自在、龍の水を得るに似て、虎の山に靠るが如し。快達の妙處、それが活人劍である。」

恁麼の殺活兩用の金剛王寶劍を掌握する人は、人を殺して一毫も傷害の跡を残さず、——人を活して寸糸も生起の痕を留めず、其不可思議底如何にも奇術士の様に見ゆるが決して奇術士の如き人の眼をくらますのではありません。殺すときは徹底的に殺す。故に殺して傷害の跡を残さず。——活するときは徹底的に活す。故に活して生起の痕を留めず。——是が禪の禪たる所以であり、是が眞理の眞理たる所以である。斯の如

き奇術士に近き靈行活動を假に向上の一路と云ふ。——此の向上の一路は、今日學者の云ふ絶對の靈泉、——此の絶對の靈泉より湧出する其靈味は無論千聖不傳である。——釋迦でも、達磨でも、孔子でも、キリストでも、洞山でも、臨濟でも、乃至、八百萬神でも、乃木大將でも、東郷元帥でも、言語や文字や、手まね、足まねで傳へることは出来ぬ。所謂、陰陽不到處、一片好風光、——それである。——

然るに恁麼の深意を知らざる平凡の學者は、かうすれば神の本體が見ゆる、かうすれば佛の面目が拜せらるゝ、かうすればこれが眞如だ、かうすればこれが絶對だ、と云うて水底にあ

る明玉を採らんとして、徒に大波小波を起す、それと同じく、天上にある月をば知らずして、水中に映ずる影を眞箇の月なりと思つて、身心を勞し、勞し勞して終に水中に勞死せし馬鹿猿と好一對である、と皮肉な評を下して居る古人があるが、如何にも人心の弱點を指摘したものであります。斯く云ふ衲も、殘念ながら馬鹿猿の同類であります。——既に不傳と云ふ以上には、文字も、言句も、議論も、理窟も、一切、用不著でなければならぬ。それに何ごごぞ、一千七百則の公案、五千餘卷の經文、八萬四千の法門、——種々無量の葛藤を拈出するや。——それは又それで、一種不可思議の仔細がある。信ぜざれば、

次にある本則に参じ来るべし。参は、須く、實参なるべし。悟は、須く、實悟なるべし。作麼生か、實参底、——作麼生か、實悟底。

◎本則

舉、僧問洞山、如何是佛、山云、麻三斤、

讀方

舉す、僧、洞山に問ふ、「如何なるか、是れ佛。」山云く、麻三斤。」

「洞山、」聞く禪宗史上に、洞山と呼んで居る人が、三四人あります。其中で青原行思の四世雲巖曇晟禪師の弟子の洞山良

价、(曹洞宗の開祖)と同じ青原行思の法脈に屬する雲門偃(雲門宗の開祖)の弟子の洞山守初、禪師が有名であります。此十二則に出て居る洞山は雲門の弟子の洞山守初禪師である、と古來より云ひ傳へてゐます。(良价の方は筠州洞山、守初の方は襄州洞山。)此碧巖頌古の作者、雪竇禪師は、洞山守初の七十一歳の時に誕生された、と云ふことであります。「佛、」は佛陀、浮屠、浮圖、勃陀、浮陀、浮頭、勃駄、母陀、母駄、沒駄の略語で何れも梵語に對する音譯語である、と井上君は云うて居らるゝ、普通佛と云へば、娑婆世界の大神教主、釋迦牟尼如来と云ふことになつて居ります。佛の一字に、自覺、覺他、覺

行、圓滿、の三義を含有して居ると經文研究者は申して居る。」
 或人は佛の自覺、覺他、覺行圓滿を、大學の明德を明かにし、
 民を新にし、至善に止まる、それに比して講究して御座る。」
 大乘佛敎者を以て自任する人は、理想的人格者、非人格的最高
 絶對を佛と認識して居る部類もあります。——此則に出て問
 ふ僧の佛は、如何なる佛を云ふのか。洞山の答へられた麻三斤
 は、如何なる意味の佛であるか。眞箇禪を研究する學者は、十
 二分に力を入れて練磨すべきであります。「麻三斤、」は單に麻
 とあるから、食する胡麻か、織物にする麻か、明瞭を缺いて居
 ります。支那では昔より、穀物でも斤數で賣買すること云ふこと

であります。さすれば、麻三斤と云ふ洞山禪師の答は、食する
 胡麻としても、織物にする麻としても敢て妨げはありません。
 要は洞山禪師が此時、食する胡麻を斤量して居られたか、織物
 にする麻を斤量して居られたか、それに依つて明瞭になるわけ
 であります。然るに、それが不分明である。されど禪學研究に
 は必ずしも、それが必要ではない。食する胡麻でも、織物にす
 る麻でも、當位即答であればそれが何よりの明答であり、妙對で
 あります。現今日本に流傳して居る佛敎中の禪宗に於て、問答
 と云ふ一の古式がある。是は支那(支那に限りません)に於て禪
 の特に盛大なる時代に、事實行はれて居りました。日本の問

答は其まねであります。故に今日執行する問答は假装的で精神が充實してをりません。見ても聞いても實に笑ふべきである。然るに本則に出て居る問答は眞劍であるから、局外から見ても聞いても、自然に力も入るし、味ふことも出来る。——一人の雲水僧が襄州の洞山守初禪師の處へ來て、「如何是佛、」佛とは、ごんなものであります、と質問しました。「禪書を御覽になつた方々は無論、御存知でありませう。雲水僧、修行者の、大善智識に向つて質問する、其質問の大部分は、祖師西來意と、佛とであります。此僧も普通の凡僧と見えて、紋切形の、如何なるか是れ佛と拈じ來つて守初禪師の正念相續に、一石を投

じました。」雲門禪師は佛の問に乾屎橛、——臨濟禪師は西天の胡子、——守初禪師は麻三斤。——されど異曲同工である。其理由は、雲門禪師の答へられた乾屎橛は雲門禪師當時の佛、——臨濟禪師の答へられた西天の胡子は、臨濟禪師當時の佛、——守初禪師の答へられた麻三斤は、守初禪師當時の佛、——若し人あり衲なまに、即今如何なるか是れ佛と問ひ來らば、衲は答へて曰く、一管筆、——一篇の原稿。——諸君、云ふ勿れ、話頭も也また知らずと。——經意に依れば、金剛經に「一切の諸相を離る是を諸佛と名づく、」又、若し色を以て我を見、音聲を以て我を求めば、是人、邪道を行ず、如來を見るこ

と能はず、とある。秋野師は、佛のことを非常相と云ふ。此の非常相の當體を洞山は無言語の處に言語を借りて麻三斤と云うたと云うて居らるゝ。」故無門禪師は洞山老人、些の蚌蛤禪に參得し、纔に兩片を開いて肝腸を露出す。然も是の如くなり。雖も、且く道へ、甚の處に向つて洞山を見る、と洞山禪師を評し、頌に、突出麻三斤、言親意更親、來說是非者、便是是非人、と云うて、僧の佛を問ふ、それ自身が佛であることを暗に漏してあります。——白隱禪師は、衆生本來佛なり、水と氷の如くにて、水を離れて氷なく、衆生の外に佛なし、衆生近きを知らずして、遠く求むるはかなさよ、——自己自身が

佛でありながら、佛を外に向つて求むる、實にはかない、と歎息なされた。諸君眞箇の佛は如何なるものか。——衲は常に落草して曰く、佛に二種あり、一は可見有相の佛、——一は不可見無相の佛。——可見有相の佛は、三千里以外、三千年以前、印度に存在なされた釋迦牟尼如來。此の佛には、言語を以て接することも、形相を以て拜見することも出来ず。故に是を可見有相の佛と云ふ。」不可見無相の佛は、敢て印度に限らず、支那にも日本にも宇宙全體に昔も今も存在して居ります。されど此の佛には言語の接すべきなし。形相の拜見すべきなし。故に是を不可見無相の佛と云ふ。——可見有相の佛は、

佛在世其の當時に現存する人のみ拜見することが出来て、其他の人は決して拜見は出来ません。」然るに不可見無相の佛は、佛在世に存在する人は無論のこと佛在世でなく、末世の今日、我等でも親しく拜見することが出来ます。」可見有相の佛が却つて拜見出来ずして、不可見無相の佛が寧ろ拜見出来ることは、如何にも禪的らしくありますが、決して禪的ではありません。

一は有形肉體の佛、—— 一は無形理體の佛、—— 御存知の如く有形肉體の佛は娑婆世界に御一人、故に佛ご同時代の人でなければ、可見有相の佛が却つて不可見佛ごなります。」無形理體の佛は、全宇宙、盡乾坤、時間空間を貫徹して存在、

故に心眼そのものが開けて居れば、何れの時代でも、何れの國の人でも、可見佛ごなります。」以上は衲なまが一己の妄想。」眞箇の佛は、有形の外に非ず、無形の内に非ず、無形そのまゝ有形、—— 有形そのまゝ無形、—— 無形即有形、—— 有形即無形、—— そこに眞箇の活佛が現前する、月隨碧山轉、水合青天流。

◎頌

金鳥急、玉兔速、善應何曾有輕觸、展事投機見洞山、跛鱉盲龜入空谷、花簇簇錦簇簇、南地竹兮北地木、因思長慶陸大夫、解道合笑不合哭、唵、

金鳥、急にして、玉兔、速かなり。善應何ぞ曾て輕觸有らん。事を展べ機に投じて洞山を見たり。跛鱉、盲龜、空谷に入る。花簇々、錦簇々、南地には竹、北地には木。因つて思ふ、長慶と陸大夫。道ふことを解せば笑ふ合し、哭す合からず。咦。」

「金鳥、玉兔」は、「事文類聚」に「日者太陽之精、積而成鳥象、鳥陽之類、其數奇」「月者陰精之宗、積而成獸象、兔陰之類、其數耦」とあります。日輪の中には鳥が居る様に見え、月輪の中には兔が居る様に見えます。古句に、白雲深處金龍躍、碧

波心裏玉兔驚、とあります。——何れにせよ月日のたつのは速かなるもの、——童話に、日と月と雷公と三人で旅行し、或家に一泊、翌朝、雷公の未だ起きざるに、日月二人は既に出立、暫くして雷公夢をさまし、日月の居らざるを見て、家主に問ふ、日月の二人は何れの處にあるや。家主云く日月は、曉天に發足なされました。——雷公歎じて曰く、嗚呼、月日のたつのははやいもの、と。——所謂、光陰は矢の如しであります。

「善應何曾有輕觸」は、善應、洞山禪師、その答の如何にも無造作にして極めて善美を盡せしを云ふ。「何曾有輕觸、」常に此の事三昧、恒に正念相續、一舉手、一投足、身心脫落、脫

落身心底、故に如何なる場合に於ても未だ曾て輕觸せられしことなし。衲の如きは常に輕觸輕觸。——「展事投機、」守初禪師の云はれし言葉に、「言無展事、語不投機、承言者喪、滯句者迷、」と云ふのがあります。それを雪竇禪師、拈じ來つて展事投機と吟じられしものならん。眞僞は親しく雪竇禪師に面談してみなければ不分明であります。——要するに展事投機とは、言語のこご、言語の上には實物はない。火、火と云うて、あつからず。水、水と云うて、つめたからず。それと同じであります。「見洞山、」眞箇の洞山を見ようと思はゞ、洞山その人にならざるべからず。「跛鱉盲龜、」チンバの鱉、メクラの龜、本則の問

僧その人の拙劣なるを評したのであります。白隱禪師は、毒語心經の深般若波羅密多と云ふ處へ、「若把色空談般若、響中跛鱉逐飛禽、」と云ひ同じ心經の色不異空、空不異色、と云ふ處へ、「色空不二法門裡、跛鱉拂眉立晚風、」とあります。茲にある雪竇禪師の跛鱉盲龜云々と兩々對照して見るも一興であります。——「花簇々錦簇々、」「見わたせば、柳、櫻をこきまぜて、都の春ぞ錦なりけり。」菅公の歌に、「このたびは、ぬさもごりあへず手向山、もみちの錦、神のまにく。」盡乾坤、花ならざるなし。全宇宙、錦ならざるなし。「南地竹、兮北地木。」支那の楊子江の南方には竹が澤山、北方には木が澤山、日本で云

へば、「紀州蜜柑に尾張大根。」古句には、「一樹春風有兩般、南枝向暖北枝寒。」花簇々錦簇々、——南地竹兮北地木、此の二句は、開福の徳賢禪師が、或僧が洞山の麻三斤と云ふ意旨如何と問うた時、花簇々錦簇々と答へ、會すやと問ひしに、僧不會と答へ、徳賢禪師更に南地竹兮北地木、と云ひしを雪竇禪師、茲に引き來りて麻三斤の意旨を明瞭にする材料とされたもので、如何にも花簇々錦簇々、——南地竹兮北地木、——その如く、自然であり又美事である。「因思、」それに就いて思ひ起すことがある。「長慶陸大夫、」陸大夫は、陸亘のここ。此人、在家の人であるが、南泉普願禪師に參禪して佛法の何ものたる、禪の如何

なるものと云ふことを會得して居らるゝ。南泉禪師の遷化なされた時、陸亘大夫は悔みに行き、靈前に坐して、アハッご笑はれた。それを院主が見て、御貴殿は、お師匠様の悔みに來て笑ふとは何事ぞ、と云うて大いに怒られた。其時、陸亘大夫は、「道ひ得ば哭せん、」と云はれたが、院主、其意旨を解する能はず、只默然であつた。茲に於て陸亘は「蒼天々々、先師世を去るこそ遠し、」と云うて慟哭なされました。それを後に長慶が聞いて笑ふべし哭すべからず、と云はれた。それを借用して雪竇禪師が、「解道合笑不合哭、」と吟じられました。聊か人情ばなれをして居る様であるが、決して人情ばなれはして居り

ません。無論陸亘の胸中は人情の如何を以て判断すべきものではありません。本則の麻三斤も亦復然り、文字や言句の間に首を没して居ては、百年たつても、千年たつても悟れません。「咦、」禪録中には、時々見る字である。提起の意とも、冷遇の意とも、微笑の意とも、云うてあります。今はどの意か。「天桂禪師は、是ほごに言うても分らないかと云ふ意味で、咦、ごいうたのであると云はれた。衲なまは天桂禪師の尻馬に乗り、咦ご云ふもの、衲は衲に向つて咦、——敢て諸君に向つて咦ごは云はぬ。咦。」

雪竇禪師、本則を頌じて、金鳥急に玉兔速か、善應何ぞ曾て

輕觸あらん、ご。洞山禪師の麻三斤底をチラリご放出なされました。見んとすれば十萬八千、——實に石火電光、間に髪を入れず。」

知るべし、洞山禪師の應機接物、着々の中、而して出身の處ありしことを故實全師は云うて居らるゝ。「洞山禪師が麻三斤ご答へられた腕前は、ゴーンご撞けばゴーンと響く、鐘が鳴つたか撞木が鳴つたか、鐘ご撞木の間が鳴る、ご云つた如く其答の妙にして且つ速かなることを宗演師は敬賞して居らるゝ。」大内君は、如何なるか是れ佛と云ふ問に對して、雪竇禪師が金鳥急に玉兔速かなりご答へたものご見てもよい、ご云うて居

る。」井上君は、光陰は矢の如し、時間は是れ生命である、しかるに「如何なるか、是れ佛、」なんと云ふ古臭い質問を資本にして、あちら、こちらの禪寺をあさりまはり、飯にありつくなんて、生命の浪費、實に此上ない次第である、と憤慨して居らるゝ。本則にある問答の當時は事實、さうであつたから斯く云はれたのでありませう。」如何にも光陰は昔より矢の如しと云うて、凡そ世の中に光陰ほごはやい者はありません。東坡の詩に、「竹馬春風如昨日、不知何時雪滿頭、」と云ふのがある。大禹は寸陰を惜む、「少年易老學難成、一寸光陰不可輕、」——陶侃と云ふ人は、禹聖人すら寸陰を惜む、況んや凡人に於てを

や、分陰を惜まざる可からず、と云うて勤勉なされたとある。」(東洋の閑言語、西洋の活言語は別にあるあり、今は略す。)金鳥、玉兔が佛か、佛が金鳥、玉兔か。「金鳥、玉兔が麻三斤か、麻三斤が、金鳥、玉兔か。」麻三斤が洞山か、洞山が麻三斤か、「金鳥、玉兔が雪竇か、雪竇が金鳥、玉兔か。」苟も禪學を修せんと欲する人は、輕忽に鞞あてをしてはなりません。——多くの人の中には禪と云ふものは當意即妙で、云はゞ頓智でよいと云ふが、それはトンチキ禪と云ふもので本當の禪ではありません。本當の眞禪は、何ぞ曾て輕觸あらんで決して輕舉盲動すべきものでない。洞山禪師の如きは、明頭來や明頭打、暗頭來や

暗頭打、四方八面來や旋風打、虚空來や連架打、と云ふ善應底である。故に虚應なし。必ず答が一々其間に的中して而して一々活路がある。論より活證、之是の麻三斤を看よ。——麻三斤、——そのものに實參し、そのものを實悟せずして徒に麻三斤と云ふ言語文字を逐ひ廻し、洞山禪師の眞面目を見たの、見ようなぞと思はひ、跛鱉盲龜入空谷、——當てちがひ、

方角ちがひ、——元來佛と云ふものは問うて顯はるゝものでなし、答へて出るものでなし。佛の眞法身は猶ほ虚空の如し。——佛身充滿法界、——花簇々それが即佛、錦簇々それが即佛、南地の竹、それが、北地の木、それが、そのまゝ、

佛、佛、佛。——佛は一切の相を離れて一切の相を離れず。故に眞佛は隨縁赴感、——思慮分別を以て本體を覺得せんとするは愚の至り。——眞佛は自他雙忘の處に現じ、不二一體の處に顯はる。否、自他雙忘が眞佛、——不二一體が活佛。

——それに就て記憶を呼び起した。(陸亘大夫の話) 雪竇禪師は長慶禪師に共鳴して、解道合笑不合哭と、——流石は長慶禪師だ。佛祖の本意に徹底して居る。笑ふべし哭すべからずとは、能く云うた。——必ずしも反對に出るのが禪機ではない。人情を破るのが宗意ではない。要は徹底にあり。——笑ふべき時は徹底笑うて泣くべからず、泣くべき時は徹底泣いて

笑ふべからず、笑ふも泣くも怒るも、語るも黙するも、坐するも立つも、總てに於て徹底、——徹底、——徹底。——如
何なるか是れ佛ご云ふ問に、洞山禪師、麻三斤と答へられた。
それでよし、諸君わかりましたか、わかるはずだが、まだわか
りませぬか、咦。——然らば好事もなきに如かず。

雪竇禪師、御自身でも聊か婆言がすぎたと思つて、自分自身
に向つて咦、——拙衲も古人の口車に乗つて無駄口を弄しま
した。咦。——無駄口の序でに笑ふべからず泣くべしご云ふ
一話を添へて置きませう。

おさつ婆さんご云つたら、白隱禪師の會下で第一流の大姉で

あります。その婆さん、娘の時から天性非凡で、自然に禪機
を得て居つた。家は代々、日蓮宗で、法華經を大切に居
られた。或時、其法華經の藏してある本箱の上へ腰をかけて
居るのを父親が発見して、「あゝ、勿體ない罰が當るぞ、」と云
つて叱りつけると、娘は平氣なもの、「お經もお尻も同じも
んだ、」ご云つて洒蛙々々ごして居るから、父親は吃驚仰天
して、さあ娘が発狂したのだご心配した揚句、白隱禪師を訪
ねて此話をしますると、禪師は、「それでは衲が歌を書いて
やるから、これをそつと娘の部屋へ貼つて置いて、娘が是を
見て何ご云ふか、其れを聞いてお出で、」ご云うて一筆さら

くご書いてやられたのが、有名な

「暗の夜に鳴かぬ鴉の聲聞けば

生れぬ先の父ぞ戀しき、」

ご云ふ歌であります。すると、娘は、「これは誰の歌か、」ご訊きました。父親は、白隠禪師の御書きになつた歌だ、ご云うご、——「フーン妾の腹ご同じだ、」ご云ひました。是が因縁で禪師について鉗鎚を受けることになり、遂に白隠禪師門下第一流の大姉ごなりました。——此女は、支那の無鹽そつちのけご云ふ頗る醜婦で、色の黒いデボチン、——心は西施、楊貴妃も及ばぬほどの美人でありました。故に自分

では、一生獨身で暮すと云つて居りましたが、父親が聞き入れないので、止むを得ず、婿を取り、小供が出来、長壽を保つて死にました。」婆さんになつてから、可愛い孫を亡くした時、それを悲しんで慟哭して居るのを見た人が、「悟つたご云ふ婆さんに似合はない、」ご云つたのを聞いて、「妾の涙はお前達の涙とは違つて、一滴一滴が寶珠である。千僧萬僧の供養より、此婆の一滴の涙を孫は喜ぶぞ、と答へたといふ。是は解道合哭不合笑、である。恁麼の日本婆さんご、支那長慶と是れ同じか是れ別か、鶯王は乳を喫すべし。咦。」

(以上昭和十二年一月十六日講演)

378
309

昭和十二年九月廿五日印刷
昭和十二年十月五日發行

發行者兼

佐々木 四郎

東京市日本橋區室町二丁目一番地一
三井合名會社內

發行所

東京市日本橋區室町二丁目一番地一
三井合名會社 考查課

終

